

多文化共生時代の コミュニケーションを 演劇で学ぶ。

「平田オリザの高校生演劇教室」



グローバル教育、コミュニケーション教育の
必要性が指摘され、
英語力向上やプレゼンテーション・スキルの
育成に力を入れる学校も多い。
いずれも、スキルである。しかし、スキル以前に
多様性を受容し、違いを楽しむマインドセットこそ
これからのグローバル教育、コミュニケーション教育に
必要なのではないでしょうか？
演劇を通して多文化共生を体感する
「平田オリザの高校生演劇教室」を紹介します。



チームで協力して創ったシナリオに合わせて演じる高校生たち。練習を繰り返すうちに、表情もどんどん豊かになっていきます。

レッスンの流れ

2015年12月25日、27日に立命館大学OICで開催し、関西の高校生10数名が参加した「平田オリザの高校生演劇教室」。レッスンを通して生徒たちがどのように変わったのか、時系列でレポートします。

1日目は、演劇づくりを始めるためのイントロダクション。ボディワークやコミュニケーションゲームを通して、他者と触れ合うこと、演じることに少しずつ慣れていきます。最初は少し硬い表情だった生徒たちも、レッスンが進むにつれ、表情もほぐれていきます。

2日目は、いよいよ演劇づくりスタート。オリザさんからシナリオ創りのレクチャーを受けた後、生徒それぞれが考えてきた演劇の設定（場所・背景・問題）のアイデアをホワイトボードに貼りだし、それを見た生徒たちが、自分が演じたい設定に投票。上位2つが選ばれ、そのアイデアに共感したメンバーがチームになって演劇を創っていきます。

3日目。生徒たちは、自分たちが考えたシナリオに沿って実際に演じながら、シナリオに修正を入れ、完成度を高めるために「稽古」を重ねます。頭で考えたときには面白かつ

3 みんなの共感を集める 2つのアイデアを選ぶ

みんなが考えてきた「場所・背景・問題」を、ホワイトボードに貼り出し、共感する、演じてみたいアイデアに投票。選ばれたアイデアのもと、2つのチームが誕生しました。



1 場所・背景・問題の アイデアを考えてくる 2日目

参加者には、あらかじめ「演劇入門」（平田オリザ著）を読み、自分が作りたい演劇の「場所・背景・問題」のアイデアを考えてくるという宿題が出されていました。



1 まずはカラダほぐしから スタート 1日目

2人1組や3人1組になって、ことばではなく背中や舌で語り合ったり、完全に体重を預けて「ゆだねる」を体感します。体がほぐれることで、心も徐々に開いていきます。



4 登場人物とプロットを 考える

チーム毎に元のアイデアを膨らませ、登場人物や場面、プロットを検討。コンテンツとしてはおもしろくても、演劇にすると不自然だったり、状況が伝わらないことも。



2 シナリオ創りの レクチャーを受ける

設定した場所や背景などのイメージを観客と共有するためには、第三者が登場させることが重要。他者とのやり取りの中で、場面や背景が自然な形で観客に伝わります。



2 ゲームで「演じる」を 体験する

1〜50のカードを引いて、数字の多さに比例する「活発な趣味」「おとなしい趣味」を即興で演じ、その会話からお互いにカードの数字の大小を探ります。



5 台詞や動きをつけて シナリオを創っていく

登場人物に台詞や動きをつけ、シナリオを作成。実際に声に出して台詞を読んだり、身体を動かして演じてみながら、自然な展開、台詞、動きへと調整していきます。



3 キャッチボールと縄跳びを 「エア」で演じる

子供頃誰もが体験したことのある遊び、キャッチボールと縄跳びを「エア」でやってみます。キャッチボールはぎこちなく、縄跳びはスムーズに。



6 自然な演技のコツを 体感する

シナリオ創りの合間の演技レッスン。台詞に力が入りすぎる生徒には、寝転んで雑誌を読みながら台詞を言うよう伝え、余分な力の抜けた自然な演技を引き出していきます。



自然に背景や状況を 観客に伝えるには、 どんな場所に、 どんな人物が登場する 必要があるか、考えない？

【場所】 最もいいのはセミパブリックな場面。例えば、地方の結核療養所の面会室。出入りする登場人物でドラマができます。

【背景】 他者を導入することで、自然なコミュニケーションが発生します。例えば引っ越しなら、業者がいて、お父さんの友達や近所の人が手伝ってくれるので、コミュニケーションが生まれ、背景が自然な形で観客に伝わります。

【問題】 主人公ひとりに問題を抱えさせすぎないこと、登場人物に多様性を持たせることが重要。例えば、倒れている人がいた場合、「助ける」「隠す」「逃げる」など多様な反応がほしい。忠臣蔵が長く演じられているのは、主君が死んで赤穂藩という共同体が大きな運命の変化に会い、藩士たちの価値観が多数交錯するからなんです。

キャッチボールと 縄跳びの違いは？

キャッチボールは、速度やコースなどイメージの個人差が大きく、共有が難しい。また、2人ずつばらばらで演じ、観客もいません。一方、縄跳びは、集団的記憶が高校生に残っているため、イメージを共有しやすく、全員で演じ、観客もいるため演じやすい。「イメージの共有のしやすさ」「集団でひとつのことをやるのか、ばらばらでやるのか」、この2つの視点で理解することが重要です。

たシナリオが、実際に演じてみると、複雑すぎて面白さがうまく伝わらなかったり、逆に演じてみることで新しいアイデアが浮かんだり。また、プロットを考えるのが得意な人、自然な台詞を思いつく人、間の取り方がうまい人、力の抜けた演技のできる人など、生徒それぞれが自分の得意を活かしながら、演劇づくりに取り組みました。

昼過ぎにはオリザさんを前にリハーサル。説明的な台詞や不自然なプロットなどについて厳しいフィードバックがあり、今まで創り上げてきたシーンを一から考え直す場面も。それでも生徒たちは、タイムプレッシャーと戦いながら、指摘を受けたポイントをぎりぎりまで修正。自主リハーサルを繰り返し、段取りや台詞を叩き込みます。

夕方17時。いよいよ発表。3日間の集大成は、演劇としてはまだまだ十分なものではありませんでしたが、校風の異なる高校の生徒や先生たちが出会い、異種混合チームで取り組んだこのワークショップは、参加した彼らにとってまさに、多様性に気づき、違いを受け入れて、ゴールに向けて協創するという、多文化共生のプロセスを体験する場となりました。

平田オリザ、演劇教育を語る。

——演劇教育に取り組む意味とは？
演劇とは集団でイメージするゲームです。演じ手が強いイメージを発信し、そのイメージを観客が共有できるかどうか、それが鍵なのです。それがあって初めて観客は演劇の世界に引き込まれます。普段の会話でも、イメージの共有ができていない時に強いことを言われると、ひいてしまいか「キモい」となるでしょう？劇作家はイメージ共有を仕掛け、虚構を創る名人と言えますね。

そして、イメージ共有が大切なのは、演劇の世界のことだけではなく、現代の日本社会では、人々のコンテキスト（文脈・背景）がバラバラだということを前提に、イメージを共有することが課題となっています。ここに演劇教育を学校へ導入する時代の要請があります。

——欧米のハイスクールでは、演劇教育に力を入れる学校が増えている

3日目

チームA 「結婚式前日に新郎が急死。花嫁の決断はいかに？」

生徒が考えたプロット
● 結婚式の前日に新郎が急死した。しかし新婦は結婚式をしたいと思い、結婚式の会場に親戚や友人を招待している。
● 式直前のロビー。結婚式の業者、司会者（新婦の友人）、新婦の妹と弟が、この事態をどうしたらいいか、話し合っている。
● 本来なら結婚式をやめて葬式をすべきだが、新婦は結婚式をしたいと言い張る。新郎の家族や親戚・友人への感謝を示したいとの理由。大金持ちの叔母が新婦を支持する。
● 結婚式を行う。



講評 花嫁の心の揺れを表現するには、決定的な外的変化が必要。
演劇では大きな嘘をつきませんが、そのためにはディテールをていねいに作り込まないと。細部はリアルだけれど、全体としてはだまし絵になっている、それが演劇。細部がよくないとお客さんに突っ込まれる。
この場合、普通は新郎の両親は悲しみ、葬式をしようとするはず。そういった葛藤も描かないと、嘘っぽくなる。「もちろん中止ですよ」という台詞もだめ。「中止じゃない？」として、リアクションを展開した方がいいね。
演劇は、内的な心の変化を表現するのには向いていない。過去の心を語るのもおかしい。だから、花嫁の心が揺れていることを表現するためには、「それなら揺れ動かしなさい」と観客を納得させるような、外的な変化がないといけないうです。

チームB 「ハロウィンパーティに謎の客、現る。その真相は？」

生徒が考えたプロット
● ハロウィンの夜、あるお店でハロウィンパーティが行われている。
● 店員たちの間で、昼間に別の店に来た謎の客（変な人）のことが話題に上る。
● 店長は遊びに来た客のひとりに好意を寄せている。
● 店長が好意を寄せていた客が席を外す。
● 謎の客が店に現れ、店員たちは接客を押し付け合うが、席を外していた客が戻るのを見るなり、店長が接客を希望する。
● 謎の客が、実はその客の生き別れた親とわかる。



講評 伏線と現実性のバランスが大事。自然な形で背景を伝える工夫を。
店長がハケてからワンシーンつくらないと、店長が席を外した客に好意を寄せていることがわからないね。「あの店長キモイよ、見え見えだね」というような台詞を入れるだけで、状況が観客に伝わります。ここのボディの部分の部分が薄っぺらいですね。
プロットのバランスも重要。店長が好意を寄せている客が母子家庭だということや、謎の客のことなど、店長が来た時に伝えておいた方がいい。そこまでしてから謎の客が来るとわかりやすい。また、謎の客がいなくなった時に、客が店員を呼びに行って「何あれ？」「変なの来た」という会話があれば、客が気持ち悪がっていることがわかりますよ。後半の展開は良かったです。



平田オリザ
劇作家・演出家・青年団主宰。こまばアゴラ劇場芸術総監督・城崎国際アートセンター芸術監督。東京藝術大学 COI 研究推進機構 特任教授、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター客員教授、四国学院大学客員教授・学長特別補佐、京都文教大学客員教授。

「多文化共生」は、自分の価値観を疑い、相対化するところから始まるんです。

——そうですね。日本の学校で演劇教育を実施するならば、小中高と、どのようなかリキュラムになりますか？
演劇というより、表現というくくりの方がいいかもしれません。

小学校の段階では2つの軸があります。ひとつは国語に近く、言語運用能力を育てるということ。文章を読んで「この後、君なら何を言う？」と聞いていきます。もうひとつは「コミュニケーションづくり」。幼児のままの遊びのように役を演じたり、役割を入れ替えて遊ぶレッスンです。幼稚

園や保育園でやることを、小学校でもやっていきます。
小学校高学年から中学校の段階になると、今回の演劇レッスンでやったような方法で、「誰でもが演劇できる」という状態にしたい。人間関係を論理だけで捉えるのではなく、「異文化理解」でつながる体験を共有する機会にしたいですね。

高校の演劇教育は、芸術としての演劇を創る段階になります。これは演劇（表現）コースの高校や、選択の授業で実施するイメージです。

——利他、を考える時にも、グローバルな「異文化理解」が鍵となると考えています。オリザさんの実践が

演劇教育に特に熱心なのは、オーストラリアやカナダなど、多くの移民を受け入れている国。英語の運用能力の向上や、異文化の子どもの理解する教育として重視されています。例えばニューカマーの子どもたちにも、演劇の中で「おいしいセリフを言う」役割を与えて自己肯定感を高めるというようにしていますね。

——利他、を考える時にも、グローバルな「異文化理解」が鍵となると考えています。オリザさんの実践が